令和四年度　新宿区生涯学習フェスティバル

「短歌」「俳句」「川柳」

作品集

主催　公益財団法人新宿未来創造財団

共催　新宿区

【審査員】（五十音順）

【短歌】

『短歌人』元編集委員
紺野　裕子

「りとむ」短歌会　所属
樋口　智子

短歌結社「かりん」会員
増田　啓子

【俳句】

俳句雑誌「瓏玲」代表
今野　龍二

「沖」俳句会同人副会長
栗原　公子

俳誌「花野」会員
島貫　恵

【川柳】

川柳研究社　副幹事長
芦田　鈴美

川柳きやり吟社　社人
長瀬　熙実

川柳人協会　相談役
米島　暁子

（敬称略）

作品中の括弧・漢字・かな遣い・送り仮名・ふりがな・空白などの表記は、作者の意図を尊重し、原文のまま掲載しています。

短

歌

区長賞

我の名の「友」を表わす手のかたち最初に習えり手話教室に　　友部　美奈子

特　選

列をなす黄金（こがね）の稲架の竿のさき空はまあるく何処までも青　　近藤　勝子　戸山短歌会

夏の雨そのうち戻る日射しなら野の花色の服で出かける　　高松　恵子　西原短歌会

口吻に樹液を吸ふとふ蝉のやう氷カラカラストローまはす　　谷光　順晏　西原短歌会

秀　逸

挨拶が時に気まずいこともある気づかぬふりのマスクと日傘　　岡本　万寿子

時子（ときこ）さんを「じこちゃん」と呼びて親しめり今は昔のわたくしたちは　　布宮　赫子

角筈（つのはず）の都電のホームに君を待つとおき昭和の夏の夕ぐれ　　古谷　昭代　西原短歌会

鈴虫の真夜（まよ）に鈴振る音澄みしねむれぬ夜は耳をすませる　　柳　秀子　西原短歌会

五月の風胸に抱（いだ）きて指しおり読みつ微睡（まどろ）む夢またゆかし　　永松　桃江

日盛に穂岳の壁が紅色に王冠のごとくジャンダルム光る　山口　敏子

廃校の校庭（にわ）に生げれる草紅葉刈る人もなく雀飛びかう　山口　敏子

霾るや標本木は凛としてまだかまだかと人は急かすも　岡本　万寿子

どんぐりが髪にポトンと落ちてきてあらっと思わず笑顔になりぬ　布宮　赫子

乳呑み児をいだく娘のまなざしに芽ばえし母性永遠（とわ）にと祈る　長田　歌奈栄

カレンダーめくり忘れてあと追えど戻すすべなく時我れを待たず　長田　歌奈栄

九十歳（きゅうじゅう）の友と歩める公園のあじさいの花色づき始めん　友部　美奈子

脳内に不思議な虫が増えてきて我を圧する苦しさ怖さ　石川　夏山（麦の会）

逆上りできず泣く子は作家へと連載書けず編集泣かす　石川　夏山（麦の会）

新しきひまわりの種をいただきて新しき土に植えきし夕べ　大谷　行雄

蚕養（か）う人もなき里の廃屋に桑の巨木は一つ立ちおり　大谷　行雄

コロナ禍に硝子戸ごしに面会す一〇三の母とマイク片手に　小林　繁子

一〇三の母嬉しげに好きな物すべて食べよと主治医に言われ　小林　繁子

枝豆の収穫うれし写真撮る涼しい朝のベランダ菜園　久保田　尚代

羽化しても網戸（あみど）につかまる蝉がいた朝からずっと雨風強し　久保田　尚代

縁で添い子に結ばれて孫に酔うこの後はそっと墓誌に並ばん
ベランダに雀が一羽雨宿り身じろぎもせず網戸の向こう
両親の関係かわる病あり余生の今はまるで恋人
ご褒美という名の間食やめられずスルリとはけぬ二十歳のスカート
思い出の故郷は今秋祭り村人集まり豊作祝う
春来れば氷河でさえもとけゆくにわが心のとけるのはいつ
ヒマワリの花にかこまれ嫁二人写真を出してなつかしむなり
亡き父の持たしてくれたオモトの鉢今年も真赤な実をつけている
三回目切っても芽を出すドラセナに私も一歩踏み出す元気
今朝も又赤紫の日本列島ため息ついてカレンダー見る
今日もまた孫の手を引き保育園一歩一歩に我が夢たくす
汗かいて孫と一緒の盆踊り孫の姿に我を重ねる
わが庭に孫たち集い楽しみぬ幸せ運ぶ線香花火
熱帯夜明けて眺める庭の隅垣に絡まる朝顔の花
久かたの太鼓の音もなつかしやコロナの中の盆踊り華やぐ

熊澤　幸生　残照の会
熊澤　幸生　残照の会
生地　和美　戸山短歌会
生地　和美　戸山短歌会
松江　佐市　デイサービス　ハミッツ
杉本　聿子　デイサービス　ハミッツ
宮田　ケヱ　デイサービス　ハミッツ
宮田　ケヱ　デイサービス　ハミッツ
下川　幸子　デイサービス　ハミッツ
下川　幸子　デイサービス　ハミッツ
志村　あけみ　デイサービス　ハミッツ
志村　あけみ　デイサービス　ハミッツ
伊藤　清和　デイサービス　ハミッツ
伊藤　清和　デイサービス　ハミッツ
河野　怜子　デイサービス　ハミッツ

ハミッツで作ったひまわり持ち帰り家族そろって皆で楽しみぬ
ヒマワリの花の工作それぞれに机に立てて皆で楽しむ
真っ黒の土よりいでし大根の真白き肌に触るる喜び
再会を果たせし今日の喜びを祝うが如くさつき花咲く
戦争のリアリティーを初めて知りぬ核狂乱の今この時に
「ショウワミターイ」笑いころげる少女達意味は無さそう重たき昭和
隅田川花火花咲く水鏡アルバム継ぐ三世代
母親の愛の深さの海女ロマン歴史絵巻の志度寺の壁画
砲撃にけむる地下壕歌声に耳を澄ませば少女のたてり
白河の関を越えたる球児たち日焼けの顔を頼もしく見ゆ
軍艦になり戦った寺の鐘今海底で魚の長屋
負けん気が強いあなたに譲る勝ち次はないよと半笑い浮く
へぎ蕎麦を食べる楽しみ秋の旅車窓に拡がる野辺も楽しき
一日をなにする気にもなれずしてただ一日を雲とながれる
卒寿なる母と野に出(いで)つむ菫髪に付ければ「幸せ」と笑む

松本　尚子（デイサービス　ハミッツ）
松本　尚子（デイサービス　ハミッツ）
瓜生　紘子（戸山短歌会）
瓜生　紘子（戸山短歌会）
中川　富子
中川　富子
野崎　正宣
野崎　正宣
飯島　弘子
飯島　弘子
矢川　浩子
矢川　浩子
吉澤　満千子（戸山短歌会）
吉澤　満千子（戸山短歌会）
近藤　勝子（戸山短歌会）

ラフな襯衣後姿の良き案山子その背に魅(ひ)かれ今朝も歩きぬ　栗田　三和子　戸山短歌会

「薔薇の施肥頑張りました」と花絵文字あかるく九十二歳のメール　栗田　三和子　戸山短歌会

夏空に浮かぶ大きな白い雲好きな綿あめ思い出すなり　小又　美佐子　デイサービスハミッツ

雨にぬれ家路を急ぐ道のわきタマアジサイの花可憐なり　向山　幸恵　デイサービスハミッツ

外出も二の足を踏むこの猛暑義理を贈りに行く百貨店　小山　一湖　北新川柳会

川沿いの道を散策して帰える鱗光らせ跳ねる魚見て　小山　一湖　北新川柳会

夕焼けや志摩の海女小屋迎えの児赤いカラスと星の五月雨　大山　新吾

長谷寺の一目千両花のれん歴史絵巻の万華鏡　大山　新吾

過ぎし日の馬は緑の夏が好きからまつの道に子を乗せて行く　高松　恵子　西原短歌会

二つ三つ御苑に落ちる白き葉が父母のかげ見すハンカチの木や　古谷　昭代　西原短歌会

うから等が別れ涙す戦世もひとしく照らすお天道さま　柳　秀子　西原短歌会

あつちごちこちこつこつつんとコロナ禍のわれのあしたに白き芙蓉よ　谷光　順晏　西原短歌会

日が暮れる空にほんのり夕の月地上の猛暑そ知らぬお顔　加藤　春水　西原短歌会

陽に焦げて信号待つ間も汗流る切手を買いに昼食のあと　加藤　春水　西原短歌会

四つ頭茶会の法を受けてゐる本堂に吾(あ)のにはか尼僧や　熊谷　恵美子　戸山短歌会

敷き松葉の飛び石の上を歩みゆくはじまる茶の湯小宇宙へと　熊谷　恵美子

息をつく音なき廊下のまん中でフットライトにおはようと言う　戸山短歌会　岡野　真弓

六十ではじめた書道墨を継ぐ一筆ごとにおもしろさ増す　岡野　真弓

里芋はねっとりとまたやはらかくしみしみ食ふてみな幸せに　岩見　京子

あの角もこの道もただそばにいてくれ五十年ありがとう母　岩見　京子

車窓から見える街並美しいシルバーパスのバスの初乗り　村田　多恵子

クラス会会いたい友の連絡先空白続き無事祈る　村田　多恵子

みどり児は一升餅を背負い立ち真っ赤な顔で泣きじゃくりおり　石間　千賀子

「癌ですね」余命宣告されし夫と歩くひまわりゆれる夕暮れの道　石間　千賀子

新しき未来始まる今日(けふ)ここにアクセル踏めば初恋おぼゆ　永松　桃江

死にたいと何千回もつぶやいて生きてきた君安らかにあれ　河原　日向子

大荷物中身(おおにもつなかみ)は何(なん)と問(と)われれば御荷物(おにもつば)化けた母にありんす　上路　里恵

家制度廃止(いえせいどはいし)も知らぬ跡継(あとつ)ぎにしょわれて逃(に)げる母(はは)もまぼろし　上路　里恵

淡彩の生描き来て原色を塗りたき衝動胸を衝き上ぐ　阿部　毅一郎

湯煙は暗き夜空にかき消えてただ音もなく風花の舞う　阿部　毅一郎

審査員選評

選評

紺野　裕子

『時子(ときこ)さんを「じこちゃん」と呼びて親しめり今は昔のわたくしたちは』

何が切っ掛けで「じこちゃん」と呼ぶようになったのだろう。幼い頃のままに呼ぶ親しさ。「今は昔」を上手く取り込んでいる。

『どんぐりが髪にポトンと落ちてきてあらっと思わず笑顔になりぬ』

「ぽとん」と「あらっと」が呼応し歌にリズムが生まれた。結句の明るさに引き込まれる。

『我の名の「友」を表わす手のかたち最初に習えり手話教室に』

簡潔に言いおおせている。作者の名に「友」が入っていたのは偶然だが、最初に学ぶに相応しい文字だ。どんな形をするのだろう。

『コロナ禍に硝子戸ごしに面会す一〇三の母とマイク片手に』

「硝子戸ごし」に「マイク片手に」は歯がゆかったろう。コロナ禍の面会を端的に伝える。

『羽化しても網戸(あみど)につかまる蝉がいた朝からずっと雨風強し』

初句の「も」には、雨風のため飛び立つことの出来ない蝉を見つめる作者の思いが詰まる。

『ご褒美という名の間食やめられずスルリとはけぬ二十歳のスカート』

今の現実をユーモラスに表現。多くの人は微笑みながら頷く。ご褒美は活力の源だ。

『「薔薇の施肥頑張りました」と花絵文字あかるく九十二歳のメール』

薔薇の手入れを怠らず、それをメールで発信する九十二歳の方。その若々しさに打たれる。

『角筈(つのはず)の都電のホームに君を待つとおき昭和の夏の夕ぐれ』

角筈という地名は昭和四十四年には消えた。かつての地名の光景が細やかに再現され情感をもって詠まれた。懐かしさが滲む。

『みどり児は一升餅を背負い立ち真っ赤な顔で泣きじゃくりおり』

視覚聴覚から生き生きとした場面が立ち上がる。ただ初句を読むと乳飲み子を想像するので固有名詞を入れるなど何か工夫が要る。

選評

樋口　智子

『列をなす黄金（こがね）の稲架の竿のさき空はまあるく何処までも青』

稲の黄金と空の青のコントラストによって秋の実りの風景が余すところなく表現されている。「まあるく」で調べもゆったりして、空の広さと響き合う。

『我の名の「友」を表わす手のかたち最初に習えり手話教室に』

新しいことを覚えるという心躍る感覚が〈「友」を表わす手のかたち〉という具体をもって表現されている。

『夏の雨そのうち戻る日射しなら野の花色の服で出かける』

雨の外出という憂鬱さを払拭する「野の花色の服」。上の句の表現も巧み。

『五月の風胸に抱（いだ）きて指しおり読みつ微睡（まどろ）む夢またゆかし』

本に指を挟める「指しおり」の語が効いている。うたた寝のたゆたうような感覚が一首全体で表現されている。

『三回目切っても芽を出すドラセナに私も一歩踏み出す元気』

切られるという逆境を跳ね返すような、植物の生命力に自身も励まされている。

『真っ黒の土よりいでし大根の真白き肌に触るる喜び』

収穫の喜びの景。色彩のコントラストでより実感される。

『一日をなにする気にもなれずしてただ一日を雲とながれる』

結句の「雲とながれる」にあてどなく一日過ぎてしまった感覚が表現されている。

『ラフな襯衣後姿の良き案山子その背に魅(ひ)かれ今朝も歩きぬ』

日課の散歩なのだろう。案山子に親しみを感じていること、またそれを目指して歩く様子が伝わる。

『里芋はねっとりとまたやはらかくしみしみ食ふてみな幸せに』

里芋がとてもおいしそう。〈しみしみ〉は、しみじみでもあり、味が染みている感じも受ける。

選評

増田　啓子

『口吻に樹液を吸ふとふ蝉のやう氷カラカラストローまはす』

蝉が口吻(こうふん)に樹液を吸う様子に飲物をストローで吸う自分を重ねた着眼点が面白い。「カラカラストローまはす」にユーモアの妙味も混じる。

『挨拶が時に気まずいこともある気づかぬふりのマスクと日傘』

新型コロナウイルス蔓延による自粛の生活も三年目に入った。外出先で知人に逢って気ずかぬふりをする。女性ならではの歌。

『夏の雨そのうち戻る日射しなら野の花色の服で出かける』

「野の花色の服」が効いている。夏の雨、日射しと季節をつややかに描き、歌に生命力が吹きこまれた。

『鈴虫の真夜(まよ)に鈴振る音澄みしねむれぬ夜は耳をすませる』

美しい静かな歌。耳元に鈴虫の音が、そして眼前にも情景が立ち上がってくる。

『羽化しても網戸(あみど)につかまる蝉がいた朝からずっと雨風強し』

羽化をしても網戸につかまる蝉の強さ、したたかさを、「朝からずっと雨風強し」と場面の切り取りが巧みな歌。

『角筈（つのはず）の都電のホームに君を待つとおき昭和の夏の夕ぐれ』

君との忘れられない夏の思い出。角筈の都電のホームが具体として昭和を色濃くした歌。

『列をなす黄金（こがね）の稲架の竿のさき空はまあるく何処までも青』

列をなす稲架、竿のさき、その対比に広がるまあるい青空が美しい。捉える視線が良い。

『廃校の校庭（にわ）に生げれる草紅葉刈る人もなく雀飛びかう』

廃校、刈る人もない草紅葉、飛びかう雀、穏やかな風景の中に忘れられたものと今を生きる雀たちの共存。混ざり合っているのが面白い。

『日が暮れる空にほんのり夕の月地上の猛暑そ知らぬお顔』

地上の猛暑、とそ知らぬお顔の月。世界が混乱の時、コロナもオミクロンもない楽しい短歌がかけがえなく思えた。

俳

句

区長賞

御朱印の乾く間仰ぐ秋の虹　　加藤　卓哉（あをぎり俳句会）

特　選

幾千のこだまが渡る夏の谷　　高辻　康治

鎮魂の花火三発より始む　　後藤　和久

車座になれぬ可惜夜（あたらよ）さくら舞ふ　　飯島　弘子（あをぎり俳句会）

秀　逸

ひっそりと茗荷の花の白きこと　　岡本　万寿子

ざらついたまま立秋の喉仏　　田中　朋子（麦の会）

アルバムに貼れぬ一枚合歓の花　　岡﨑　久子（麦の会）

秋夕焼何故を忘れてなる大人　　石川　夏山（麦の会）

甲板へ一番乗りの夏帽子　　衣川　洋子

応募作品一覧

背伸びする袴を飾る千歳飴　高辻　康治

廃住（はいおく）に香りゆたかにスズラン咲く　山口　敏子

板楽の響き遠くに送り盆　山口　敏子

生れ地に売地のチラシもがり笛　島﨑　民子（抒情歌を歌う会）

終バスに息切らしてや冷房きく　島﨑　民子（抒情歌を歌う会）

WEバスに天道虫と揺られけり　岡本　万寿子

欄干に我を見つめる蜻蛉をり　岩見　京子

パンプスの青きリボンや夏来る　岩見　京子

殊更に音立てすすり走り蕎麦　荒井　司雄（あをぎり俳句会）

夜明けぜよ龍馬無頼の懐手　荒井　司雄（あをぎり俳句会）

来し方を問はず語りに盆支度　峯岸　まこと（あをぎり俳句会）

尖塔の風見くる雹弾く　峯岸　まこと（あをぎり俳句会）

湯上りの項にはたく天瓜粉　野田　しげり（あをぎり俳句会）

撒水の生き物のごとゴムホース　野田　しげり（あをぎり俳句会）

縁切りの寺とも知らず恋蛍　加藤　卓哉（あをぎり俳句会）

雨意迫る闇に揺蕩ふ蚊遣香　堀江　明（あをぎり俳句会）

ぬばたまの闇に膨らむ丁字の香　堀江　明（あをぎり俳句会）

慰霊から世界平和へ花火の輪　後藤　和久

台風が去りて友呼ぶ子らの声　友部　美奈子

テーブルにコップとストロー雲の峰　友部　美奈子

ブラウスを浴衣に着替えデートかな　笹木　弘（麦の会）

和菓子屋の老舗の軒に江戸風鈴　笹木　弘（麦の会）

削除するアドレスあまた秋暑し　田中　朋子　麦の会

先頭の遺影いちばん涼しそう　岡﨑　久子　麦の会

孫のゆめいくつもあって夏の蝶　朝香　艶子　麦の会

くり返し名を呼びかけておがらたく　朝香　艶子　麦の会

氷菓舐む台場の風へ「ゆりかもめ」　五十嵐　秀山　麦の会

モンローの薔薇と口紅共に赤　五十嵐　秀山　麦の会

鉦叩読経終われば鳴いており　石川　夏山　麦の会

口中のひんやりぴりり夏料理　衣川　洋子

廃鉱の千草色づき雲流る　太楽　登美子　新宿戸山句会

秋めくや工事現場の力こぶ　太楽　登美子　新宿戸山句会

麦茶飲む喉がゴクリと喜んだ　久保田　尚代

午前二時目が覚め団扇（うちわ）手で探す　久保田　尚代

夏がきたスイカ割して甘かった　青木　孝子　デイサービス　ハミッツ

今年もねひまわり咲いたうれしいな　青木　孝子　デイサービス　ハミッツ

セミ運び蟻の行列せわしなく　松江　佐市　デイサービス　ハミッツ

夕暮れに蝉来ぬ暑さ我が庭に　橋本　弘子　デイサービス　ハミッツ

浴衣着て友と連れだち盆おどり　杉本　聿子　デイサービス　ハミッツ

浴衣着て天神祭りの輪の中に　杉本　聿子　デイサービス　ハミッツ

暑い夏浴衣すがたがすずしげだ　矢数　洋子　デイサービス　ハミッツ

一人暮らしスイカを買って持て余す　宮田　ケヱ　デイサービス　ハミッツ

いつも聞く蝉に鳴き声まだ聞かぬ　松江　榮子　デイサービス　ハミッツ

暑い夏浴衣の似合う女の子　松江　榮子　デイサービス　ハミッツ

ひぐらしのこえさみしく夏終わるなり　古賀　万佐子　デイサービス　ハミッツ

浴衣着て家族で行った盆おどり　古賀　万佐子　デイサービス　ハミッツ

ひまわりがかほをならべてこんにちわ　増田　千枝子　デイサービス　ハミッツ

おもいだすゆかたいろいろおまつりに　増田　千枝子　デイサービス　ハミッツ

日の出前まどろみの中セミの声　下川　幸子（デイサービス　ハミッツ）
街路樹の緑も昼寝か夏の午後　下川　幸子（デイサービス　ハミッツ）
池の面を渡る涼風蓮の花　志村　あけみ（デイサービス　ハミッツ）
楚々として雨にたたずむ蓮の花　志村　あけみ（デイサービス　ハミッツ）
雨上がり蛍飛び交う里の道　伊藤　清和（デイサービス　ハミッツ）
赤ピンク暑さ支える百日紅　伊藤　清和（デイサービス　ハミッツ）
子供等に浴衣着せ日を思い出す盆　河野　怜子（デイサービス　ハミッツ）
ふるさとの海の青さとセミしぐれ　河野　怜子（デイサービス　ハミッツ）
久し振り湯から上がって浴衣着る　松本　尚子（デイサービス　ハミッツ）
かん高き子供の声ぞスイカ割り　松本　尚子（デイサービス　ハミッツ）
なんすれぞ酷暑老女をさみしゅうす　中川　富子
老いの身に立夏の風の容赦なく　中川　富子
鬼が島おさげが夏の大冒険　野崎　正宣

招き猫孫と新そば箸笑う　野崎　正宣
一山の葉裏返りて夏きたる　飯島　弘子（あをぎり俳句会）
訳あって独り楽しむ枯野行　矢川　浩子
透明なつららの風に突き刺され　矢川　浩子
新米や茶碗のへりの一粒も　近藤　勝子（沙羅の会）
陽を追ひて猫の天下の冬座敷　近藤　勝子（沙羅の会）
陽射しうけ鳴くセミの声耳にいたし　遠藤　幸子（デイサービス　ハミッツ）
とうきびのまとうころも寒いのか　遠藤　幸子（デイサービス　ハミッツ）
丸亀城背子の寝息と夕桜　大山　新吾
ドーベルマン涙でおもらし新園児　大山　新吾
素潜りのメール来し午後夏の果　国藤　習水
ポケットのどんぐりこぼれ着陸す　国藤　習水
あおぞらもミンミンうたうなつやすみ　山﨑　公太

にわか雨庭の紫等葉生き生き　村田　多恵子

湯の町や射的風鈴また射的　河原　日向子

一杯の白湯の味まで年初め　河原　日向子

白鷺の動かざるまま暮れ残る　阿部　毅一郎

磨り硝子越しにヤモリの指細し　阿部　毅一郎

審査員選評

選評

今野　龍二

『鎮魂の花火三発より始む』

徳川吉宗の治世享保年間に飢饉とコレラの流行で、大川端で川施餓鬼を催し、翌年から川施餓鬼と川開きの日に水神祭を催し花火を打ち上げた。ここから、災害や疫病で亡くなった人への鎮魂の花火大会が始まった。大地震や異常気候による災害が後を絶たない。そして、コロナの蔓延で花火大会自体も危機にさらされている。

今日は久々の花火大会、鎮魂の花火である。開始を告げる花火三発が打ちあがった。

『アルバムに貼れぬ一枚合歓の花』

恋の歌である。万葉以来詩歌は恋を詠うもの。遠い昔の恋人の写真、或いは二人並んだ写真かも知れない。現在の夫には決して見せることはできない。

『車座になれぬ可惜夜（あたらよ）さくら舞ふ』

花の宴である、何時までも眺めていたいそんな惜しむべき夜だが。今はコロナ禍の真っ只中、密を避け、飲酒のままならぬ。何時まで続くのだろう。

『縁切りの寺とも知らず恋蛍』

縁切り寺、本来悪縁を断ち切ってくれる有難いお寺なのだが。時に良縁をも断ち切ってしまうこともある。かつて皇女和宮が江戸入場の際に最後の宿が板橋、ここには有名な縁切り榎があった。和宮一行は「方違え」をして加賀藩の屋敷に最後の宿をとった。触らぬ神に祟りなし、という事。恋蛍は縁切りの事などは知らない。

『ひっそりと茗荷の花の白きこと』

庭の隅に少しばかりの茗荷畑がある。畑と言っても手を入れなくとも季節になればけっこうな量が出来てしまう。放っておくと、一日花だが淡黄色の花が次々と咲く。

『ざらついたまま立秋の喉仏』

このままだと喉仏がざらついていることになる、喉仏がざらつくよりも立秋がざらついた方が俳句的には面白い。ざらついたままの立秋喉仏であったら区長賞候補。

『ふるさとの海の青さとセミしぐれ』

ふるさとの海はどこよりも青い、俳句は一点に焦点を合わせるものとを使ってしまうと焦点がボケてしまう。ふるさとの海の青さよ蝉時雨

『鬼が島おさげが夏の大冒険』

両親に連れられての帰省の一こま。怖―い鬼の伝説の島だ。このおさげ髪怖いもの知らず。大冒険が始まった。

『訳あって独り楽しむ枯野行』

どの様な深い訳があるのでしょうか、読者の想像力が試される。枯野と言う暗いイメージの場所を楽しむ。深い訳の謎が深まるばかり。

選評

栗原　公子

『御朱印の乾く間仰ぐ秋の虹』

参拝した神社仏閣でご本尊のお名前や伺った日付を墨痕あざやかに書き入れていただくご朱印。その墨の乾くのを待ちながら、ふと空を見上げると秋の虹。神様のご加護を頂いたようで嬉しい一日になったことでしょう。

『車座になれぬ可惜夜（あたらよ）さくら舞ふ』

コロナ禍になってから人に会う機会がすっかり減りました。仲間と集まることも中止となりマスクを外せない息苦しい毎日。桜の舞い散るこんなに素敵な夜もたった一人。一日も早いコロナの終息を祈るばかりですね。

『秋夕焼何故を忘れてなる大人』

子育ての頃「なぜ?」「どうして?」の質問攻めに困ったものです。確かに大人になると疑問があっても突き詰めて考える事を忘れてしまっている事に気付かされる一句です。

『甲板へ一番乗りの夏帽子』

夏帽子の人は余程この日を待ちかねていたのでしょう。真っ先に甲板へ駆け上がった後ろ姿に嬉しさが溢れているようです。

『撒水の生き物のごとゴムホース』

夏の水撒きは大変な仕事。ホースを伸ばしきらずに勢いよく蛇口を捻るとまるで生き物のように身をくねらせて水を吐き出します。水撒きした者だけが知る面白さですね。

『くり返し名を呼びかけておがらたく』

迎え火を焚いて迎える人はお連れ合いでしょうか。くり返しお名前を呼びかける様子にお相手を慕う気持ちが溢れています。

『日の出前まどろみの中セミの声』

夜明け前から蝉の声が聞こえてきます。短い一生を精一杯鳴いていると思うと健気さを感じますね。

『ふるさとの海の青さとセミしぐれ』

何時も思い出すのは懐かしい幼い日。海の青さも蟬時雨も故郷に勝るものはありません。

『新米や茶碗のへりの一粒も』

艶々と光りかがやくような新米。お米作りの大変さを思えば一粒たりとも粗末にしては罰が当たると教えられたものです。

選評

島貫　恵

『幾千のこだまが渡る夏の谷』

「夏の谷」に立ち、数多の木魂が渡っていくと感じている作者。夏の一字から八月、戦争、原爆忌などを連想させる。自身の感受したものを無理なく素直に表現している。

『ひっそりと茗荷の花の白きこと』

茗荷の花が白いというのは写生。ひっそりとは作者の感じた表現である。写生に終わらず「ひっそり」していると主観を言ったところが一歩踏み込んで成功している。

『ざらついたまま立秋の喉仏』

「ざらついたまま」の身体的感覚が新しいし、説得力がある。どこかすっきりしない喉仏と、暦の上では秋だがまだまだ暑さの残る季感との配合が妙。

『老いの身に立夏の風の容赦なく』

立夏の頃は、青嵐のような強い風も吹く。老いの身には、そんな風も「容赦なく」なのかもしれない。容赦なくと飾らない感じたままの言葉で表現して気持ちが伝わってくる。

『御朱印の乾く間仰ぐ秋の虹』

鎌倉の円覚寺のような広々とした大寺の境内が目に浮かんだ。偶然架かった秋の虹に作者の嬉しさ、喜びが感じ取れる。

『ぬばたまの闇に膨らむ丁字の香』

闇と丁字の香がうまく響き合っている。視覚と嗅覚の相乗効果である。

『甲板へ一番乗りの夏帽子』

遊覧船の甲板か、もっと大きな船かもしれない。誰よりも先に甲板に出て大海原を見渡している。夏帽子が明るく気持ちの良い句。

『ポケットのどんぐりこぼれ着陸す』

旅先で拾った大事などんぐりだろう。着陸と同時にポケットからぱらっと零れ落ちてしまった。旅が終わってしまった淋しさも感じられ、どんぐりが色々を想像させる一句。

『一杯の白湯の味まで年初め』

新年、朝一杯の白湯を飲んでいる。身体の中を落ちていく透明な水に心を新たにしている様子が見える。抑えた表現に感覚が光る。

川

柳

区長賞

悲しみの風化はさせぬ慰霊の日　宮川　令次

特　選

ワクチンの賞味期限の早いこと　大竹　弘子（百三喜楽会）

二度と来ない今日を楽しく自分流　中川　富子

笑い皺（じわ）中に隠した泣きぼくろ　矢川　浩子

秀　逸

筆持てばうまく書きたい欲がでる　青木　孝子（デイサービス　ハミッツ）

我が散歩階段もなく坂もなし　志村　あけみ（デイサービス　ハミッツ）

折鶴へ届け届けよ平和の灯（ひ）　飯島　弘子（きやり吟社）

故郷から届く果実の季節感　小山　一湖（北新川柳会）

ああヒマだ爪切り明日（あす）にとっておこ　船山　伸夫

応募作品一覧

祭礼(まつり)なく神輿担(みこしかつ)げぬ白い足袋　大竹　弘子（百三喜楽会）

ご近所の到来物に知る絆　高辻　康治

飴と知り家(うち)までもたぬ千歳飴　高辻　康治

マスクして見なれた靴におじぎする　山口　敏子

終活（就活）を孫と一緒に競い合う　鵜殿　喜久子

要支援自立めざして筋トレへ　鵜殿　喜久子

もう啼いていいのか悩む蟬の声　友部　美奈子

沖縄に避暑に行こうか夏休み　友部　美奈子

湯に入る思わずハアーッと声が出た　久保田　尚代

若かった写真の私ピースして　久保田　尚代

デイ休み我が友だちはテレビのみ　青木　孝子（デイサービス　ハミッツ）

夫逝き長きに渡る思い出を　橋本　弘子（デイサービス　ハミッツ）

今元気デイサービスの楽しさよ　橋本　弘子（デイサービス　ハミッツ）

夏の昼暑さ厳しき蟬の声　吉田　清美（デイサービス　ハミッツ）

夕暮れの浴衣はなやか盆踊り　吉田　清美（デイサービス　ハミッツ）

わが母の機嫌よき日の越後獅子　杉本　聿子（デイサービス　ハミッツ）

ハミッツに来る楽しみよ水曜日　五味　春子（デイサービス　ハミッツ）

友と逢い握手する手に今日の幸せ　五味　春子（デイサービス　ハミッツ）

暑い夏さる痘しらせ恐れます　佐藤　イク（デイサービス　ハミッツ）

露地の先道があるやら無いのやら　伊藤　清和（デイサービス　ハミッツ）

行列は並ぶものだよとりあえず　伊藤　清和（デイサービス　ハミッツ）

真夏日もハミッツに来ると別世界　和田　節子（デイサービス　ハミッツ）

驕らずに社会の杖となる強者　宮川　令次

友すこし遠くなったかマスク取る　中川　富子

三世代女みこしに揺れる家　野崎　正宣

ビルも泣く東京砂漠の熱帯夜　野崎　正宣

露にきゆあってはならぬ是連隙（ゼレンスキー）　加瀬　誠一

人生の転機に決意大ジャンプ　飯島　弘子（きやり吟社）

気が合えば茶飲みの恋も視野に入れ　矢川　浩子

夕日うけ跳ねるいなっ子きらきらと　向山　幸恵（デイサービス　ハミッツ）

生涯の貴重な日々の今日を生き　小山　一湖（北新川柳会）

銭洗い水正宗命の刃かじ　大山　新吾

歌三線涙そうそうで揺れる島　大山　新吾

値上げには私も負けずにネを上げる　村田　優

大統領プッチン切れたら第三次（大惨事）　村田　優

旅控え近所巡りの妙（みょう）を知る　船山　伸夫

クラス会みんな会いたい友ばかり　村田　多恵子

物価高戦争終決祈願する　村田　多恵子

ひと嗅ぎしまだいけるわと母は言い　河原　日向子

無職でも生きていればと言うものの　河原　日向子

老いの影見せまいとして老いの影　阿部　毅一郎

位が下がりじいじがじじいに格落ちすす　阿部　毅一郎

審査員選評

選評

芦田　鈴美

『悲しみの風化はさせぬ慰霊の日』

広島・長崎という八月の日の他にも私達には沢山の慰霊の日があり、どの日の涙にも血の跡が残ります。「伝えたい！」という作者の思いの丈が伝わってきます。

『ワクチンの賞味期限の早いこと』

二つの意味を考えました。一つはワクチンの管理の難しさです。廃棄というニュースもありました。もう一つはワクチン効果の問題です。八波やその後に備えて、これから何度接種をしなくてはならないのでしょう。ウイズコロナの生活へ問題提起の一句になりました。

『二度と来ない今日を楽しく自分流』

友人・知人更に家族と思わぬ別れを経験することが多くなりました。「楽しく自分流」に日常を見直すヒントを頂きました。

『折鶴へ届け届けよ平和の灯（ひ）』

「生きたい」（佐々木禎子）の思いから折り続けられたと聞いています。今なお戦禍に苦しむ人々に対しても私達に出来るのは祈る事だけです。せめて「平和の灯」を信じたいものです。

『ご近所の到来物に知る絆』

「お醤油を切らしちゃって！」等と隣を訪ねる事も無くなりました。そんな中の思いがけないお心遣いは嬉しいですね。改めてご近所の大切さ、「絆」の文字の頼もしさを感じます。

『笑い皺（じわ）中に隠した泣きぼくろ』

穏やかな笑い皺のふとした一瞬に覗く涙の跡…　言葉では伝わらない力強い勇気を貰えます。

『わが母の機嫌よき日の越後獅子』

ご出身は越後？　ひばりファン？「母親の機嫌の良さ」は一家の幸せに直結します。食卓も華やいだことでしょう。

『三世代女みこしに揺れる家』

お祭り好きの女三世代に引きずられる男性陣の戸惑いが窺えます。中止続きからやっとやっとの開催へ今年の揺れは如何ばかり…想像が膨らみます。

『夕暮れの浴衣はなやか盆踊り』

開始時間にはまだまだ、でもウキウキが止まりませんね。三年ぶりの盆踊りでコロナ禍の鬱憤を晴らしましょう

選評

長瀬　熙実

『悲しみの風化はさせぬ慰霊の日』

人は悲しみも苦しみも忘れて日常をとり戻す強さがあります。忘れてはいけない事も忘れる情けなさも。風化させぬように心を寄せて。

『笑い皺（じわ）中に隠した泣きぼくろ』

隠して生きるのも老人の周りへの配慮だと思います。

『筆持てばうまく書きたい欲がある』

書く、描く、弾く、歌う、諸々欲がでるから前に進む力がでるのでしょう。

『ワクチンの賞味期限の早いこと』

賞味期限、コロナワクチンにぴったりです。５回目もあるのでしょうか。

『故郷から届く果実の季節感』

輸入や温室育ちの果物野菜で季節感は感じなくなりました。故郷を守る人の優しさですね。

『ご近所の到来物に知る絆』

今はご近所にお福分けすることも無くなりました。このようなお付き合いを羨ましく思います。

『旅控え近所巡りの妙（みょう）を知る』

コロナ自粛中は本当にそうでした。小さい我が町の知らない場所やいい所を再認識しました。

『我が散歩階段もなく坂もなし』

階段も坂も無いことにして私は散歩してます　ゆっくりと転ばないように。少し遠回りをしても。

『驕らずに社会の杖となる強者』

このような思いやりのある方がこの国を支えてくれることを願います。

選評

米島　暁子

川柳は、江戸時代から、庶民に愛され、受け継がれてきた、日本の短詩文芸です。人間の心と生活を詠み、今の時代を川柳にして、楽しんでください。

『二度と来ない今日を楽しく自分流』

人生は、一度です。今日を楽しく生きる事が大切です。リズム良くすばらしい句になりました。

『我が散歩階段もなく坂もなし』

歳を重ねると、自分に甘くなり、平らな道を選んで散歩をしています。転ばないことが一番、そう言えば、私もそうしていました。

『気が合えば茶飲みの恋も視野に入れ』

恋の句はいい句になります。若さの秘訣は恋、健康で長生きをしましょう。

『ああヒマだ爪切り明日(あす)にとっておこ』

ユーモア句になりました。明日することがあって良かった。上五のああヒマだで詠む人の共感を得ます。

『マスクして見なれた靴におじぎする』

今の時代、マスクにメガネ、帽子で、どちら様ですかと、言えず、この靴はあの方と、おじぎする。楽しい句に拍手。

『終活（就活）を孫と一緒に競い合う』

おじいちゃんは、孫の成長をよろこんでいます。家族円満な様子が見えるようで、すばらしい。

『湯に入る思わずハアーッと声が出た』

この句は実感句ですね。ステキな一日でした。

『筆持てばうまく書きたい欲がでる』

墨の香りがしてきました。筆で書いているうちに半紙が足りなくなります。情景の見える作品です。きっと字の上手い方ですね。

『故郷から届く果実の季節感』

都会に暮らしていると、ふる里の春夏秋冬が恋しくなります。フルーツが届くとうれしくなります。自分の気持ちが出ていて、いい句になりました。